



幼児のための童謡

葛原しげる

△一▽

最近、必要に迫られて、幼児のために出版されている童謡や、童謡舞踊の本、十数冊に目を通した。そして、諸方面の方々が、次々に新作を発表されているのを、まず悦んだ。また諸方の放送でも、諸社のレコードでも多くが聞けるので悦んではいるものの、さて、歌詞と曲と、また、その振付とを、詳細に味わってみると、数の多いことだけを悦んでは居れない気がしてならなくなつた。

△二▽

その為、といつても大正の中期、童謡」という言葉が、「幼児唱歌」とか、「お伽うた」に代つて聞かない数年間、とかく、感傷的なものが持てはやされる傾向があつたので、私たち少数のものは、むぎになつて、その流行を慨いては、真正面から、子供向に、明るく、楽しく、また、進取的にと、感傷本位の童謡に反対し続けたが、昭和時代になつてからの、一般童謡は、全く、所謂「ニコニコ、ピンピン」式のものになつて来たので、誰かは、日本の童謡

も、いよいよ子供向に、愈々、本ものになつたと悦んだが、しかし、中には、「明るく、楽しく」と狙う余りに、賑やかすぎて、騒々しいものも次々に現われる様になつて、先生方の注意深い選択によつて、その為、幼児の世界が、乱される事はなかつた。

△三▽

所が、終戦後の刊行物の中には、歌詞の長さも、曲の音域も、極めて幼児向に、程

よく工夫されているのだが、あまりに、手
軽に、あまりに無雑作に、作られた。童謡も、
相当の数が、流布されているかと思えるこ
とを、頗る残念に思う。

「手軽に」また「無雑作に」ということ、
それこそ、幼児の爲の童謡は、童話と同じ
く、あまり考えられない、あまり手の込ん
だものでないのが、よい。しかし、「あまり
手軽に」「あまり無雑作に」——「作られた
もの」であってはならないのである。「作ら
れたもの」は、「本もの」ではないからであ
る。古来「作文」といい、「作詞」、「作曲」
というのであるが、実は、おのずから、生
れたものこそ、本ものなのである。即ち、
自ら生れるものは、「手軽に」また、「無雑
作に」と、見えるけれども、その、生れる
や、決して、手軽に、まだ、決して、無雑
作に、ではないのであって、最も自然な、
最も巧まざる、おのずからなる誕生なので
ある。

△四△

『芸術は自然の子である』また『芸術は、

自然に錫付けにされていなくてはならぬ』
とは、あらゆる芸術にとつての本態であ
る。唯一の条件である。実は、私自ら、童
謡作詞生活四十五年の長い間の、唯一つの
モットーなのである。苦心し、推敲を重ね
たものよりも、すらすらと、苦もなく、生
れ出たものが、よい童謡だと信じている。
曲も同じであろうか。

△五△

さて、前述の童謡の本の中には、一見、
いかにも、幼児のものかと思えるが、実は
甚だ心もとないものも散見する。

あめとさる

あめが 天から ふりました

おぶどう みたいに ふりました

トップ テップ タップ トップ

ポツン ツン

おさるの子供が みました

とても ほしそくに みました

トップ テップ タップ トップ

ポツン ツン

雨が、葡萄のように見えるというのも、
子猿が、欲しげに見ていたというのも、ピ
ントが外れていませんか。また、「ト
トップ タップ トップ」の、擬声か、擬
態かも、紛れ易くて、幼児には、負担では
ありませんか、間違え易いのが、面白いと
いっても、ぐすぐりは、嫌ですね。

△六△

(お山の 通せんぼ)

お山の お山の 通せんぼ

小りすが おうちえ かえるみち

母さん おうちでまてよに

こわくて いやいや とおれない

お山の お山の通せんぼ

ぬくい日なたで こっくりこ

おひるね狐の おしっ尾が

長くて じゃまじゃま 通せんぼ

昼寝している狐の長い尾が、小りすに通
せんぼをしているというのですが、人間を
もだまかし、ばかすといわれている狐を、
恐しがらせる事は偕ておくとしても、まっ

てよに」とか、「おしっぽ」とかの用語は、困りませんか。

へ七

とんとんお山の　とおめがね
どうぶつたちが　みんなして
かわりばんこに　のぞいたよ

冒頭の「とんとん」は、お山の形容ですか。「とおめがね」の押韻ですか。それよりも、一体全体、何を謂っているのか。何が望遠鏡なのか。交代に、のぞいたのが、どうしたのですか。

へ八

たかいぞたかいぞ竹馬だ
とんとんとんとん　あるこうよ

竹馬の、高いのは愉快ながら、竹馬では、「とんとんとんとん」と、軽快には歩けなく、「こつとりこつとり」と、漫々的に、ではありませんか。

かかしのおじさん　いばってる

鳥も　雀も　とんでった

「とんでった」ではなくて、「にげてった」でしょう。

白いおもち　円いおもち
みんなのおかおに、よくにてる
そら　ふくらんだ
そら　のびた

ふくらんだり、のびたりするのは、餅焼にしても、伸びて、長くなる顔なんて、もし、細長い顔のお友達でもが、きいたら、うれしくありませんまい。それよりも、人の顔を、円いの、長いのと批評するのも好ましくないのみか、幼年時代には、断じて、こんな事に関心を有合せたくありません。

へ九

そこで、幼児の為の童謡は、幼児の世界から、生れたものでなくてはならないが、二三十年も昔、東京女高師の附属幼稚園が、神田駿河台の対岸、いわゆるお茶の水にあった頃の幼稚園で、できた「いろはか

るた」の文句こそは、当時の幼児から生れたもので、それを、当時の主事倉橋惣三先生と、小学校の主事堀七蔵先生が、選んで幼児に後を添えさせられたもの。その文句は、実に端的で、しかもズバリ、適確、正確、些の隙もない名文句であったのに、私は驚歎のあまり、反誦幾たび、たちどころに、その主題によって、生れた童謡こそ二三十後今反唱しても、私は、同じ感応を禁じ得ないのである。(以下、題が、その句である。)

へ十

「ろば　が　にげる」
ろば　が　にげる　ろば　が　にげる
トコトコ　トット
トコトコ　トット
ろば　が　にげる　ろば　が　にげる
お耳を　ふりふり
トコトコ　トット
「まり　が　つきたい」
私は　まりが　つきたいな

大きなゴムまり 白いまり
まっかなお花を かいたまり

トントントントン つきたいな
私は まりが つきたいな

おえんで ついても はずむまり
おにわで ついても はずむまり
トントントントン つきたいな

「のはら は ひろい」
のはら は ひろい
どこまで ひろい

あーれ ひろいよ どこまでも
のはらの むこうは また のはら
そのまた むこうは また のはら
のはらは つづく どこまでつづく
あーれ つづくよ どこまでも
のはらに のはらが つづいてる
のはら のはら おおのはら

「さる は ひっかく」
さるは ひっかくきやっきやっきやっ
めだま くるくる
はを むきだして
さるは ひっかくきやっきやっきやっ

あしのつめ ながい
てのつめ ながい

十一

その他、「むじがはねた」「ちかてつどう
はトンネルばかり」「たんぼぼさいた」「お
いもころころ」など、いかにも、無雑作に、
苦もなく、生れ出た短句、それが、大変な
内容を蔵しているのであった。

ここである。何の変哲もない様に見える
句ではあるが、味うほど、何だか、深いも
の、「何物か」のあるもの、それを、拡大し
て、形も整え、着物も着せて——詩にし、
曲にし、絵にも、舞踊にもして、幼児に提
供するならば、幼年時代の、心の白壁に、
強く印象付ける事が出来て、童謡も、大き
な使命を果す事が出来るのではないか。

童謡は、見、面白いもの、おかしく賑や
かなものとのみで、それに偏しただけのも
のであってはならぬこと、甘味ばかり与え
てならぬと同じである。甘味ばかりで、内
容空漠のものを以て、大切な幼時を過させ
てはならないこと、言を俟たない。

三つ児の魂に、百までもの生命を、植え
つけるのが、幼児教育の一つの責務である
時、真に幼児のものたる童謡をと思ふ時、
現在の多くの本に信頼しきっては居れない
心地がする。

そこで、保育関係の方々は、幼児の一言
一行、殊に、その眼なざしにも、注意を払
って、その求むる所のものを、早く、正し
く、つかみとって、よきものにして与えて
やることに務められたら、自らも幸福であ
り、幼児は、如何に幸福であるであらう
か。

昔のお茶の水幼稚園児の世界に、生れ出
たものを、倉橋、堀西先生が、心して選ば
れたもので、「いろはかるた」が出来たよう
に、その若干を、菲才、私が、試作したよ
うに、現在、全国に非常に多くなりつつあ
る幼児教育機関の関係者、中でも、さしあ
たり、保母の方々は、「幼児を」であるが、
「幼児と」共に暮らしつつも、「幼児に」教
わる心地になって、童謡の面にだけでも、
関心を深められる事を、祈ってやまない。

(昭和三一、一、五)